



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 3152 号 2016.7.29 発行

相模原殺傷 容疑者 2月に言動一変 障害者敵視、強める 毎日新聞 2016年7月28日



津久井やまゆり園前で献花する元職員の男性ら＝相模原市緑区で2016年7月28日午前10時22分、後藤由耶撮影

19人が死亡した相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」の殺傷事件で逮捕された元同園職員、植松聖容疑者(26)＝殺人容疑で送検＝が、入所者の手にいたずら書きをするなど勤務態度を度々注意されていたことが、同園などへの取材で分かった。さらに今年2月ごろからは「障害者は死んだ方がいい」と発言するなど様子が一変した。この時期に事件につながるきっかけがあった

可能性があり、神奈川県警が経緯を詳しく調べている。

植松容疑者は2012年12月、同園で非常勤職員として働き始めた。採用試験の書類には「学生時代に障害者支援ボランティアや特別支援学校での実習を経験しており、福祉業界への転職を考えた」と書かれ、面接でも「明るくて意欲がある」と評価されたという。

だが、常勤職員になった直後の13年5月ごろ、男性入所者の手にペンでいたずら書きをして先輩職員に厳しく注意された。「軽い気持ちでやった」と話したが、その後も遅刻を繰り返したり、保険証を3回紛失したりするなどして再三注意を受けた。一方で、同僚職員には「給料がもっと高くなるといい」などと漏らすようになった。15年1月には入れ墨が発覚。園側が勤務中は隠すよう指導したが従わなかった。

さらに、今年2月中旬には言動が一変。衆院議長公邸に大量殺人を予告するような手紙を持参したのと同じころ、同僚に突然、「障害者は死んだ方がいい」「安楽死させるべきだ」などと話すようになった。

園長らが2月19日に面接して障害者についての考えをただすと、「ずっと車いすに縛られて暮らすことが幸せなのか。周りを不幸にする。最近急にそう思うようになった」と説明した。園長が「ナチス・ドイツの考え方と同じだ」と指摘しても、「そう取られても構わない」と答え、「自分は正しい」と譲らなかった。

その考え方は障害者福祉にふさわしくないと伝えると、自ら退職を申し出たという。園はこの日で退職とし、県警津久井署から通報を受けた相模原市が緊急措置入院とした。植松容疑者は3月に退院し、5月下旬に退職手続きのために一度だけ園に来たことがあったという。

27日に記者会見した入倉かおる園長は「不真面目なところは日ごろから注意したが、思想的な発言や、人の命をどうこうするということはそれまでなかったので、突然変わった印象がある」と話した。園を運営する社会福祉法人「かながわ共同会」の赤川美紀常務理事は会見後、「職員を信じていた。まさかこんな事件を起こすなんて」と言葉を詰まらせた。【福永方人、宇多川はるか】

植物片を押収

神奈川県警が植松容疑者の自宅の家宅捜索で、葉を細かくすり潰したような微量の植物片を押収したことが、捜査関係者への取材で分かった。茶色く変色しており、古いものとみられる。2月の措置入院時に尿から大麻の陽性反応が出ており、県警は植物片が大麻の疑いもあるとみて成分を鑑定する。【村上尊一】

容疑者「ヒトラー思想降りました」

共同通信 2016年7月28日

相模原の障害者施設殺傷事件で、植松聖容疑者（26）が緊急措置入院中の2月20日、「ヒトラー思想が2週間前に降りてきた」と話していたことが28日、相模原市への取材で分かった。「ヒトラー思想」の具体的な内容は話さなかった。

ナチス・ドイツは障害者を「生きるに値しない生命」と呼び、組織的に殺害したことで知られる。

市によると、2月19日に市が面談した際、植松容疑者は「自分はフリーメーソンの信者だ」などと話し、市は緊急措置入院を決定した。この際、植松容疑者は「世界には8億人の障害者がいる。その人たちにお金を使っている。それは他に充てるべきだ」と話した。

障害者殺傷で閣僚会議＝相模原事件を受け

時事通信 2016年7月28日

政府は28日、相模原市の障害者施設で入所者が殺傷された事件を受け、関係閣僚会議を首相官邸で開く。安倍晋三首相も出席し、再発防止策について協議する。

相模原殺傷 尊厳否定「二重の殺人」全盲・全ろう東大教授

毎日新聞 2016年7月28日 福島智教授

相模原市の障害者施設殺傷事件を受け、障害者の関係団体が相次いで声明などを発表する中、全盲と全ろうの重複障害を持つ福島智・東京大先端科学技術研究センター教授から「暗たんたる思いに包まれています」というメールが27日、毎日新聞に届いた。福島さんが「今回の事件から考えた原理的な問題」をまとめたという原稿を紹介する。強者優先の社会を連想…福島智氏

「重複障害者は生きていても意味がないので、安楽死にすればいい」。多くの障害者を惨殺した容疑者は、こう供述したという。

これで連想したのは、「ナチス、ヒトラーによる優生思想に基づく障害者抹殺」という歴史的残虐行為である。ホロコーストによりユダヤ人が大虐殺されたことは周知の事実だが、ナチスが知的障害者らをおよそ20万人殺したことはあまり知られていない。

一方、現代の世界では、過激派組織「イスラム国」（IS）の思想に感化された若者たちによるテロ事件が、各地で頻発している。このような歴史や現在の状況を踏まえた時、今回の容疑者は、ナチズムのような何らかの過激思想に感化され、麻薬による妄想や狂気が加わり蛮行に及んだのではないかと、との思いがよぎる。

被害者たちのほとんどは、容疑者の凶行から自分の身を守る「心身の能力」が制約された重度障害者たちだ。こうした無抵抗の重度障害者を殺すということは二重の意味での「殺人」と考える。一つは、人間の肉体的生命を奪う「生物学的殺人」。もう一つは、人間の尊厳や生存の意味そのものを、優生思想によって否定する「実存的殺人」である。

前者は被害者の肉体を物理的に破壊する殺人だが、後者は被害者にとどまらず、人々の思想・価値観・意識に浸透し、むしろ、社会に広く波及するという意味で、「人の魂にとってのコンピューターウイルス」のような危険をはらむ「大量殺人」だと思う。

こうした思想や行動の源泉がどこにあるのかは定かではないものの、今の日本を覆う「新



自由主義的な人間観」と無縁ではないだろう。労働力の担い手としての経済的価値や能力で人間を序列化する社会。そこでは、重度の障害者の生存は軽視され、究極的には否定されてしまいかねない。

しかし、これは障害者に対してだけのことではないだろう。生産性や労働能力に基づく人間の価値の序列化、人の存在意義を軽視・否定する論理・メカニズムは、徐々に拡大し、最終的には大多数の人を覆い尽くすに違いない。つまり、ごく一握りの「勝者」「強者」だけが報われる社会だ。すでに、日本も世界も事実上その傾向にあるのではないか。

障害者の生存を軽視・否定する思想とは、すなわち障害の有無にかかわらず、すべての人の生存を軽視・否定する思想なのである。私たちの社会の底流に、こうした思想を生み出す要因はないか、真剣に考えたい。

ふくしま・さとし 1962年神戸市生まれ。小学生で全盲となり、高校生のときに特発性難聴により聴覚も失う。母が、両手の指の関節を点字の突起に見立てた「指点字」というコミュニケーション方法を考案し、よどみなく会話ができるようになった。盲ろう者として初めて大学（現・首都大学東京）に入学し、金沢大助教授などを経て現職。全国盲ろう者協会理事、世界盲ろう者連盟アジア地域代表を務める。2003年に米週刊誌タイムの「アジアの英雄」に選ばれた。

「人は障害者を差別する」 私たちの心に根強く残るホンネとタテマエ

碓井真史（新潟青陵大学大学院教授）

iRONNA 2016年7月28日

相模原施設襲撃事件。世にも恐ろしい事件だ。19人も人が殺害された大量殺人だからということはいうまでもない。だが、それだけではない。重度の知的障害者はいない方が良くと語る男性による、大量殺人だからだ。

今回の事件は、海外でも大きく報道されている。治安の良い日本で起きた残虐な大量殺人であること、そして障害者がターゲットとされたことが、報道を世界的に大きくしている。



現場となった障害者福祉施設「津久井やまゆり園」では、日没後も報道陣が取材を続けた＝7月26日午後、相模原市緑区（早坂洋祐撮影）

私たちの社会は弱肉強食ではない。ルールがあり、マナーがある。順序を守って並ぶ。高齢者には席を譲る。車椅子のためにスロープを作り、視覚障害者のために点字ブロックを作る。

お笑い芸人たちは、しばしば相方の欠点を指摘し笑いを取るが、実際に軽蔑しているわけではない。相手の間違いを指摘する「ツッコミ」も、侮辱ではなく愛情表現だ。

子どもたちは、ケンカをすることもある。ケンカは両成敗が基本だろう。いじめが起きることもある。いじめは、両成敗ではない。被害者を守り、加害者を指導しなければならない。

さらに、障害児に対するいじめなど、絶対に許されない。これは、ただの理想や抽象論ではない。学校現場において、障害児に対して、その障害のゆえのいじめなど起きたら大問題だ。即座に教育委員会に報告され、普通のいじめ問題以上に、加害者は強く指導されることになる。

芸能人や政治家の発言もそうだろう。公の場、ネット上などで、障害者を差別するような発言がなされたら、大炎上するだろう。

しかし、それでも障害者差別はある。人は、障害者を差別する。たとえば、人は見慣れないものに不安や不快感を感じる。手足がない人や、奇妙な歩き方をする人を突然見たら、戸惑う人は多いだろう。

これは、身体障害者に限らない。たとえば外国人を見たこともない人が、金髪青い眼の白人など見たら、やはり戸惑い、不安を感じるだろう。ただし、見慣れれば大丈夫だ。今は、街中で普通に外国人を見る。

パラリンピックなどの機会も大切だ。身体障害のある人々が活躍する様子を始終見ていると、もうその障害の部分にだけ注目することは少なくなり、純粹に競技が楽しめるようになる。

それでも、人は差別が好きだ。人は他の人と比較することで自分自身のイメージを作る。人は、自信があるときには自分より優れた人物と比較して自分を正しく見ようとし、自信がないときには自分より弱い相手を比較して、歪んだ優越感を得ようとする。

自分たちのチームの実力を知りたいために、強いチームと試合することを願うこともあれば、自分より弱い相手と試合し、楽々勝って相手を見下すようなチームもあるだろう。

健常者である自分と障害者である誰かを比較して、歪んだ優越感を得ようとすることもある。相手が経済的にも人格的に優れているとしても、自分のように普通に歩くことができなければ、その部分を侮辱することもあるだろう。

身体障害以上に、精神障害や知的障害は、微妙で複雑な問題を抱えている。以前であれば、街中で車椅子を見れば、奇異な目で見る人もいただろう。さすがに、現代では見慣れてきたために好奇心な目で見る人はいないだろうが。

邪魔者扱いをする人はいるだろう。もちろん、車椅子もルールやマナーをわきまえずに、通行の邪魔をしてはならない。しかし、道には様々な人がいる。子どもも高齢者も、ベビーカーも通る。強く速い人だけが他を押しつけて歩いて良いわけではない。そこに車椅子や視覚障害者がいても、同じだ。

むしろ、子ども、高齢者、車椅子などは、道路上の交通弱者である。交通強者としての自動車は、特に交通弱者に注意して守らなければならない。

車椅子が来たからといって、露骨に不愉快な顔をする人は、現代のまともな市民にはいないはずだ。それだけ、私たちは学んできた。しかし、知的障害や精神障害ならどうだろうか。

たとえば、誰かが場違いな笑顔でへらへらと笑いながら近づいてきたらどうだろう。何らかの障害があるだろうと予測ができて、嫌な顔をしてその場を離れる人は、今も少なくないだろう。

近所に内科や外科の病院ができることは、多くの人が歓迎する。だが、精神病院ができることを反対する人は、少なくないだろう。近所に身体的なりハビリ施設ができることに反対する人は、少ないかもしれない。だが、知的障害者の施設ができるとなれば、反対もあるだろう。

「弱きを助け、強きをくじく」。日本人が慣れ親しんできた言葉だ。特に若者たちは、強いものと対決し、伝統を否定し、弱いものを助けようとしてきた。しかし、現代の若者は違ってきている。

若者は保守化し、そして強いものとの対決を避けるものもいる。さらに、弱者を攻撃する若者もいる。校長にも政府にも逆らわないが、弱いものいじめをたり、ホームレスを攻撃するような若者たちだ。弱者への攻撃でストレス発散を行う人もいる。ネット上でのひどい差別的発言をストレス発散で行っている人もいるだろう。

いじめは、実は自分より優れたものに対して行われる。自分の方が上だと余裕をもって感じるなら、わざわざいじめる必要はない。自分より優れている人が憎く感じ、その人が持つ些細な弱点を突いていくのが、いじめだ。弱点は、ケンカをしないことかもしれないし、苗字が少し変わっていることかもしれない。つまり何でも良いのだ。

だが弱者に対するいじめも当然あるだろう。成績も良く、裕福で、スポーツもでき、外見も良い人が、何をしてもダメな人をいじめることもある。これは、単なるストレス発散ではなく、自分の方が優れているのに、相手の方が愛されたり認められたりしていることが我慢できないと感じるのだ。

自分が虐げられているのに、自分よりも劣っている人が特別な配慮を受けているなどと感じれば、相手への憎しみが増すだろう。こうして、障害者差別や人種差別が起きることもあるだろう。

今回の事件の容疑者は、障害者は家族や施設職員を苦しめるという。障害者がいない方が、経済的に繁栄し、平和になると衆議院議長あての手紙で語っている。施設には、重度の障害者が多かった。今回彼は、コミュニケーションが取れない障害者を狙ったとも語っている。
事件のあった津久井やまゆり園前に集まった緊急車両＝7月26日午前、神奈川県相模原市緑区（桐原正道撮影）



テレビの出演者たちは、許されない犯罪だと異口同音に語っている。その通りだ。テレビを見ている人も同感だろう。しかし、その私たちに障害者、特に精神障害、知的障害者に対する偏見差別はないだろうか。隣に知的障害者施設ができるなら、反対しないだろうか。

重い知的障害に重い身体障害が重なっている人もいる。彼らを、社会のお荷物だと感じる意識は、微塵もないだろうか。

事件に感じる世にも恐ろしさは、そこにある。私たちは殺人はしないだろう。公の場で無配慮に差別的発言をすることもないだろう。だが、私たちの心の中にも、まだまだ精神障害や知的障害に対する偏見差別は根強く残っていると云わざるをえない。

容疑者男性の言動の一部は、おそらく妄想的なものだろう。しかし同時に、現代の私たちがまだ解決できていない障害者差別への思いに通じる部分はある。自分を安全な場所に置き、容疑者男性を責めるだけでは、いけない。犯罪は、社会を映す鏡だ。目を開き、事件の全容を見、そして現代社会と私たち自身の姿をも見なければならない。

なぜ殺人鬼は生まれたか 「人間らしさ」を奪う障害者施設の現実

藤田孝典（NPO ほっとプラス代表理事、聖学院大学人間福祉学部客員准教授）



事件のあった「津久井やまゆり園」の前に集まった緊急車両 ＝ 7月26日、神奈川県相模原市緑区（桐原正道撮影）

障害者施設で19人を手にかけた元職員の男の行動は決して許されるものではありませんが、起こるべくして起こったという見方もできます。「障害者なんていなくなればいい」と思える環境があったからこそ起きた悲劇で、差別や偏見がまったくない社会だったら彼のような人間は生まれなかったのではないのでしょうか。

障害者、高齢者、ニート、引きこもり、ホームレス…。こうした人たちをひっくるめて、「役に立たない」「足手まとい」だと思ふ感情は、誰でもうっすらとは持っているものではないのでしょうか。障害者については、危険な人たちなんじゃないかという声を良く聞きますが、そういった反応は特殊なものではないということを忘れてはならない。

iRONNA 2016年7月28日

私が代表理事を務めるNPOでは障害のある方や生活困窮者の支援活動を行っているのですが、「障害者なんていなくなればいい」とか「ホームレスなんて死んでしまえばいい」といった声は、一般の市民からよく聞かされる言葉です。言ってくるのは、いたってやさしそうに見える、普通の人たち。障害者や生活困窮者を支援する必要はないし、お金のムダだという声は、14年前の活動当初からずっと言われ続けてきました。

あってはならないことが、なぜ起きたのか。容疑者自身の問題とともに、彼が置かれていた環境についても考えなければいけないでしょう。事件のあった施設では、夜勤の場合、1人で20人ほどの入所者を担当していたという情報もあります。複数の障害がある重複障害者だと徘徊も激しいし、暴言や暴力もあるでしょうから、相当な負担がかかります。

少ない職員でなるべく多くの障害者をみようというやり方自体が問題。本来であれば、重度の障害者1人に対し、常に2人～3人つく必要があるでしょう。容疑者が衆議院議長に宛てた手紙の中に「障害者は人間としてではなく、動物として生活を過ごしております」という記述がありますが、事件のあった施設は重複障害者を含めた約160人もの障害者を収容していました。施設に一括収容というのは国際的にみるとかなり時代遅れであり、それ自体が人権侵害だという指摘もある。収容者は果たして「人間らしい」生活を送っていたのか。容疑者の「動物として生活を過ごす」という表現についても、言い過ぎではない可能性もあります。

一生懸命やっている職員もつらい、家族も苦しいのだったら死んだ方がいい。彼の正義感は歪んでいるし、肯定できないが、理解できる部分もある。障害者施設に勤めたり、介護の経験がある人ならば「こんな人いなくなればいいのに」と思ってしまうようなことは一度はあるのではないのでしょうか。

また、手紙の中には「保護者の疲れきった表情、施設で働いている職員の生気を欠いた瞳」という記述がありますが、実際、その通りだと思いますよ。職員たちは疲れきっているし、十分な休みがとれなかったり、どれだけ頑張ってもやりがいが見出せないこともある。重度の障害者となると、感謝の意思とか、気持ちがつながりあうまでに時間がかかります。5年、10年関わって、初めて心を開く人もいます。しかし、障害者施設の職員の給与は宿直を入れても20万円前後が一般的。サラリーマンの平均年収より100万円前後も低い。スキルも不十分で、支援体制も整っていない中で働き続けるというのは厳しく、

離職率が高い現実があります。

障害者施設の陶芸作業所を見学する関学大の学生ら＝2015年11月、大阪府池田市の「三恵園」

ただでさえ給料が低い上に残業代も支払われないケースもありますし、最低賃金ぎりぎりでも務めている人も多い。命を預かる仕事ですから、本来は処遇を上げて、処遇に見合う人を募集して集めないといけないのですが、人手がとて足りない。だれでもいいから来てほしい、という状況で、いまや失業者が集まってくるような産業になっている。

労働の内容に比べ、対価があまりにも安すぎるのです。障害者施設の職員だけでなく、介護士や保育士もそうですが、これまで家族に委ね、押し付けてきた分野が、少しずつ社会化しているわけですが、その労働環境があまりにも劣悪で、半分ボランティアのような状況で働かされている。容疑者が社会福祉というものに対しての欺瞞性を感じていたことは確かです。

悲劇を二度と起こさないためにはどうすればいいのか。課題は山のようにありますが、彼が特殊な人間でないということ。まず誰もが内面に差別なり偏見というものをもってらんだということを受け止めなければならない。ゆとりがない社会であればあるほど、そういう感情は出てきて、弱い人たちに対する攻撃性が出てきてしまう。

差別感情をもつ人はますます増えているように感じます。この背景には、中間層の衰退があって、自分たちの生活だけで精一杯という人が増えてくると、弱い人たちに対するまなざしが厳しくなる。偏見や差別をもたないようという教科書的な説教じみたことを言うつもりはなくて、自分たちがゆとりをもって暮らせる。できれば障害のある人について思いを馳せられるように日常生活の中にゆとりを持てるようにしたい。



こういう問題があると、必ず障害者の制度を変えろとか支援しろとなるのですが、下から底上げするというよりも中間層から上に上げる政策を優先すべきです。中間層から上げると下も引っ張られますから。社会を構成している圧倒的多数の人たちを上を引き上げないと、結局、障害者も救われないのだと思います。(聞き手、iRONNA 編集部 川畑希望) ふじた・たかのり 1982 年生まれ。NPO 法人ほっとプラス代表理事、聖学院大学客員准教授(公的扶助論、相談援助技術論など)、反貧困ネットワーク埼玉代表、ブラック企業対策プロジェクト共同代表、厚生労働省社会保障審議会特別部会委員(2013 年度)、社会福祉士。著書に、『ひとりも殺させない』(堀之内出版)、『下流老人 一億総老後崩壊の衝撃』(朝日新聞出版)などがある。最新刊は『貧困世代 社会の監獄に閉じ込められた若者たち』(講談社現代新書)

ナチスを思わせる教育委員の発言、障害者は生まれてはいけないのか

岩田温 (政治学者)

iRONNA 2016 年 7 月 28 日

これは問題発言だろう。茨城県教育委員会の長谷川智恵子氏の発言だ。

障害を持った子供が産まれてくる前に、事前に中絶、要するに殺してしまえという発言だ。中絶は殺人なのかという問題は、重要な問題で、今、考察を深めている最中だから、ここでは詳しく論じない。だが、この発言は看過できない。

「妊娠初期にもっと(障害の有無が)わかるようにできないのか。(教職員も)すごい人数が従事しており、大変な予算だろうと思う」

「意識改革しないと。技術で(障害の有無が)わかれば一番いい。生まれてきてからじゃ本当に大変」

「茨城県では減らしていける方向になったらいい」

金のかかる障害者は存在そのものが負担だ。だから、茨城県ではこういう人が減ればいい。生まれてきてからでは「処分」出来ないから、生まれる前に「処分」してしまえ、ということだ。



恐ろしい発言だ。よく、リベラルの人々が、他人を「ナチス」呼ばわりするが、この人物こそ、まさにナチス的な発想に基づいた危険思想の持主だろう。

ナチスは、ユダヤ人殺害に先駆けて、障害者、LGBTの人々を殺害した。生きている価値がない劣った人間だというのが、その根拠だ。「優生学」を信奉する多くの科学者たちも、ナチスの政策を支持した。

この問題は『逆説の政治哲学』で論じたから、

詳しくは、そちらをご覧ください。

障害者殺害作戦は本部がティーアガルテン通 4 番地に置かれたことから、T4 作戦と名付けられた。全国の病院にリストを提出させ、「生きている価値のない人間」を国家が決定し、ガス室で殺戮した。無邪気な子供たちにも例外はなく「灰色のトラック」が全国の病院をまわり、「生きる価値の無い人々」を無慈悲に連れ出し、殺戮した。

私が最も衝撃を受けたのは、一枚の写真に付されたコメントだ。車椅子に乗った障害者と一人の健康的でハンサムな青年が映っている写真だ。

この写真自体は、別に驚くような写真ではない。だが、そこに付された言葉が衝撃的なのだ。

「この立派な人間が、こんな、われわれの社会を脅かす気違いの世話に専念している。われわれはこの図を恥すべきではないか」

恥すべきなのは、こうした言葉を平然と使う側の人間であって、障害者に罪はない。

ナチスとは、本当に恥ずべき存在だったのだが、現在の日本でも、ナチスを髣髴とさせるような発言を平然とする人間が、「教育委員」として堂々としている。過去への反省をいうならば、こうした問題発言を許容すべきではないだろう。

個人的な話で恐縮だが、障害者の問題は、小さいころから、よく考えていた。私の叔父には重度の障害がある。自分で話すことも、歩くことも、食べることも出来ない。小さい頃、疑問だった。何が楽しいのだろうか？ 生きていて苦痛だけがあるのではないか？ 本当に小さい頃、色々考えた。

自分は将来、高校、大学に進み、友人と遊び、綺麗な女の子と恋愛し、いずれは結婚するだろう。美味しいものも食べるだろうし、美しい場所にも訪れるだろう。

だが、叔父は自分の意思で何も出来ない。小さい子供には、周りに世話ばかりかける存在としか思えなかった。

いっそのこと死んでしまった方が本人にも楽なのではないか？

今、考えると非常に残酷だった。この残酷な思想に基づいて、障害者を次々に抹殺したのがナチスだ。

今思えば、叔父の存在があるから、家族がひとつになれている部分大きい。叔父は家族に世話になることによって、家族を家族足らしめている。平和で豊かな日本だから、そう悠長なことを言ってもらえると思うかもしれないが、それこそが日本のよさではないだろうか。

在日朝鮮人でも、障害者でも、LGBT でも、どんなマイノリティであれ、縁あって、この世に生を受け、日本に育ったわけだ。当然、生きる権利があるし、幸せになる義務がある。存在そのものが否定されてよいはずがない。全ての人が輝く日本こそが、私の誇る日本だ。決してナチスのように「生きる価値」を国家が決めるような国家であってほしくない。

(ブログ「岩田温の備忘録」より 2015年11月20日分を転載)

娘が重傷の両親「いま、どん底です」 相模原事件 朝日新聞 2016年7月28日



「津久井やまゆり園」の正門前に設けられた献花台に花を手向ける人＝28日午前、相模原市緑区、小玉重隆撮影

相模原市の障害者施設「津久井やまゆり園」であった事件で大けがをした野口貴子さん(45)の両親が28日、朝日新聞の取材に応じた。

神奈川県藤沢市に住む母親の輝子さん(76)は26日朝、救急隊員からの電話で事件を知った。「すぐに病院に向かってください」

園に入所していた貴さんは、首の後ろを4カ所刺されて重傷を負っていた。深さ4センチの傷もあり、首にあてられたガーゼが真っ赤に染まっていた。「それを見た時はもう……」と輝子さん。一命は取り留めたが、現在も集中治療室に入っている。

貴さんは園に10年以上入所している。重度の障害でコミュニケーションを取るのには困難だが、運動会などの行事には楽しんで参加していたという。水泳が好きで、江の島に泳ぎに連れて行ったこともある。

父親の宣之さん(76)は「こんなことになって。我々はいま、どん底です」と話した。

容疑者が「障害者なんていなくなればいい」と話していることについて、輝さんは「とんでもない。許せない」と涙をにじませながら語った。(前田朱莉亜)



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行